

おおかみと七ひきのこどもやぎ

DER WOLF UND DIE SIEBEN JUNGEN GEISSLEIN

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫



むかし、あるところに、おかあさんのやぎがいました。このおかあさんやぎには、かわいいこどもやぎが七ひきあって、それがかわいがることは、人間のおかあさんが、そのこどもをかわいがるのと、すこしもちがったところはありませんでした。

ある日、おかあさんやぎは、こどもたちのたべものをとりに森まで出かけて行くので、七ひきのこどもやぎをよんで、こういきかせました。

「おまえたちにいっておくがね、かあさんが森へ行ってくるあい

だ、気をつけてよくおるすばんしてね、けっしておおかみをうちへ入れてはならないよ。あいつは、おまえたちのこらず、まるのまんま、それこそ皮も毛もあまさずたべてしまうのだよ。あのわるものは、わからせまいとして、ときどき、すがたをかえてやってくるけれど、なかに、声はしやがれて、があがあごえだし、足はまつ黒だし、すぐと見わけはつくだからね。」

すると、こどもやぎは、声をそろえて、

「かあさん、だいじょうぶ、あたいたち、よく気をつけて、おるすばんしますから、心配しないで行っておいでなさい。」と、いきました。

そこで、おかあさんやぎは、メエ、メエといって、安心して出

かけて行きました。

二

やがて、まもなく、たれか、おもての戸をとんとたたたくものがありました。そうして、

「さあ、こどもたち、あけておくれ、おかあさんだよ。めいめいに、いいおみやげをもって来たのだよ。」と、よびました。

でも、こどもやぎは、それがしやがれた、があがあ声なので、すぐおおかみだということがわかりました。そこで、

「あけてやらない。おかあさんじゃないから。おかあさんは、き

れいな、いい声してるけれど、おまえはしやがれつ声ごえのがあがあ声だもの。おまえはおおかみだい。」と、さげびました。

そこで、おおかみは、あらものや荒物屋の店へ出かけて、大きな白はくぼくを一本買って来て、それをたべて、声をよくしました。それからまたもどつてきて、戸をたたいて、大きな声で、

「さあ、こどもたち、あけておくれ。おかあさんだよ、みんなにいいものをもつて来たのだよ。」と、どなりました。

でも、おおかみはまつ黒な前足を、窓のところにかけていたので、こやぎたちはそれをみつけて、

「あけてはやらない。うちのおかあさんは、おまえのようなまつ黒な足をしていない。おまえはおおかみだい。」と、さげびまし

た。

そこで、おおかみは、パン屋の店へ出かけて、

「けつまづいて足をいためたから、ねり粉をなすつておくれ。」  
と、いいました。

で、パン屋が、おおかみの前足にねったこなをなすつてやりま  
すと、こんどは、粉屋こなやへかけつけて行って、

「おい、前足に白いこなをふりかけてくれ。」と、いいました。

「おおかみのやつ、まただれかだますつもりだな。」

そう粉屋はおもつて、ぐずぐずしていました。

するとおおかみは、

「すぐしないと、くつちまうぞ。」と、どなりました。

そこで、粉屋はこわくなって、おおかみの前足を白くしてやりました。まあ、こういうところが、人間のだめなところですね。さて、わるものは、三どめに、やぎのおうちの戸口に立って、とんとん、戸をたたいて、こういいました。

「さあこどもたちや、あけておくれ、おかあさんがかえって来たのだよ、おまえたちめいめに、森でいいものをみつけて来たのだよ。」

子やぎたちは、声をそろえて、

「さきに足をおみせ、うちのおかあさんだかどうか、みてやるから。」

そういわれて、おおかみは、前足を窓にのせました。こどもや



ぎがそれを見ますと、白かったので、おおかみのいうことを、すっかりほんとうにして、戸をあけました。

ところで、はいつて来たのはたれでしたらう、おおかみだったではありませんか。

みんな、わあつとおどろいて、ふるえあがつて、てんでんにかくれ場所をさがして、かくれようとなりました。ひとりは、つくえの下にとびこみました。次は寢床ねどこにはいこみました。三ばんめは、ろの炉の中にかくれました。四ばんめは、だいどころ台所へにげました。五ばんめは、たな棚にあがりました。六ばんめは、せんめん洗面だらいの下にもぐりました。七ばんめは、柱時計の箱のなかにかくれました。

ところが、おおかみは、そばからみつけだして、ぞうきなく、

ひとりひとり、かたはしからつかまえて、ただひと口に、あんぐりやつてしまいました。ただ、大時計の箱のなかにかくれた、いちばん小さな子だけは、みつからずにすみしました。さて、たらふくたべただけたべて、おなかagakちくなると、おおかみはおもてへにげ出して、木のかげになって、青あおとしているしばの上に、ながながとねそべって、ぐうぐういびきをかきだしました。

## 三

それから間もなく、おかあさんやぎは、森からかえつて来ました。ところで、まあ、おかあさんやぎは、そのときなにを見たで

しよう。おもての戸は、いっばいにあけひろげてありました。テーブルも、いすも、腰かけも、ほうりだされていました。洗面<sup>せんめん</sup>台<sup>だい</sup>からは、こなごなにこわれていました。夜着<sup>よぎ</sup>もまくらも、寝<sup>しんだ</sup>台<sup>だい</sup>からころげおちていました。

おかあさんやぎは、こどもたちをさがしましたが、ひとりもみつかりません。ひとりひとり、名前をよんでも、たれも返事<sup>へんじ</sup>をするものがありません。おしまい、いちばん下の子の名前まで来て、はじめて、ほそい声で、

「かあさん、あたい、時計のお箱にかくれているよ。」というのが、きこえました。

おかあさんやぎは、この子をひっぱりだしてやりました。そこ

で、この子の口から、はじめておおかみが来て、ほかのこどもたちみんなたべてしまったことが、わかりました。そのとき、おおかみさんは、かわいそうな子やぎたちのことを、どんなに泣いてかなしんだか、みなさん、さっしてみてください。さういふ。

やつこのことで、おおかみやぎは、泣くことをやめて、すえ末っ子やぎといっしょに、そとへ出ました。原っぱまでくると、おおかみは、やはり木のかげにながながとねそべって、それこそ木の枝も葉も、ぶるぶるふるい動くほどの高いびきを立てていました。ところで、おおかみやぎが、おおかみのようすを遠くからよく見ますと、そのふくれかえったおなかの中で、なにかもそもそ動いているのがわかりました。

「まあ、ありがたい、おおかみのやつ、うちのこどもたちを、お夕飯ゆうはんにして、うのみにのみこんだままだから、みんなきつとまだ生きているのだよ。」

こうおもって、おかあさんやぎは、さつそく、うちへかけこんで行って、はさみと針と糸をとって来ました。それから、おかあさんやぎは、このばけものどてつ腹を、ちよきんとはさみで、ひとはさみはさみました。するともうそこに、一ぴきのこどもやぎが、ぴよこんとあたまを出しました。おかあさんはよろこんで、またじよきじよきはさんで行きますと、ひとり出で、ふたり出して、とうとう六ぴきのこどもやぎのこらずが、とびだしました。みんなぶじで、たれひとり、けがひとつしたものもありません。なに

しろ、この大ばけものは、むやみとがつつがつして、ただもう、ぐつく、ぐつく、そのまま、のどのおくへほうりこんでしまつていたからです。

まあうれしいこと。こどもたちは、おかあさんやぎにしつかりだきつきました。それから、およめさんをもらう式の日、仕立屋のように、ぴよんぴよんはねまわりました。

でも、おかあさんやぎは、こどもたちをとめて、

「さあ、そこらで、みんな行つて、ごろた石をひろつておいで、この罰<sup>ばち</sup>あたりなけだものが寝<sup>ね</sup>ているうちに、おなかにつめてやるのだから。」といいました。

そこで、こどもたちは、われがちにかけだして行つて、えんや

ら、えんやら、ごろた石をあつめて、ひきずって来ました。そうして、それを、おおかみのおなかに、つまるだけつめこみました。すると、おかあさんやぎが、あとから、ちよつちよつと、手ばしこく、もとのようにぬいつけてしまいました。それがいかにも早かったので、おおかみがまるで気がつかないし、ごそりともしないまにすんでしまいました。

おおかみは、やつとのこと、寝<sup>ね</sup>たいだけ寝て、立ちあがりました。なにしろ、胃<sup>いぶくろ</sup>袋のなかは石がいっぱい、のどがからからにかわいてたまらないので、ふき井戸のところへ行つて、水をもうとしました。ところが、からだを動かしかけますと、おなかの中で、ごろた石がぶつかりあつて、がらがら、ごろごろ、いい

ました。

がらがら、ごろごろ、なにがなる

そりやどこでなる、腹はらでなる。

六ひきこやぎのなくこえか、

こりや、そうじゃない、ごろた石、

おおかみは、こううたいました。

さて、やっとこすつとこ、ふき井戸の所まで来て、水の上にかがもうとすると、おなかの石のおもみに引かれて、おおかみは、のめりました。そうして、いやおうなしに、泣き泣きおおかみは、



水の中におちこみました。

遠くで見えていた七ひきのこどもやぎは、みんなかけよつて来て、「おおかみ死んだよ。おおかみ死んだよ。」とさけびながら、おあさんやぎと手をつなぎながら、おおよろこびで、井戸のまわりをおどりまわりました。



# 青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おおかみと七ひきのこどもやぎ  
DER WOLF UND DIE SIEBEN JUNGEN GEISSLEIN

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫  
著者 グリム兄弟 Bruder Grimm  
URL <http://www.aozora.gr.jp/>  
E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)  
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU  
URL <http://aozora.xisang.top/>  
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>